

加賀城下町の侍の階級と住居

加賀藩（金沢を中心としていた、封建時代の石川県）のハブだったこの地では、家臣である侍たちには、階級に応じて決められる扶持に適当な土地と財産が与えられました。城の周りの居住地は江戸時代（1603—1867）の初め頃に何度か分割され直しましたが、1659 年を最後に、その後は大きな変化はありませんでした。基本的に、侍の階級が高いほど、彼らの住居は城に近く、土地も広がったのです。地位の低い侍の場合、城から離れた位置に、少ない土地が配分されました。このように上級の侍を城の近くに置き、街の外からの攻撃を受けづらくするのは、政治的かつ戦略的な観点から考えられた設計です。

金沢では、町の約 7 割が侍の住む場所で占められていました。これには、城、藩の施設、侍屋敷、足軽（歩兵）の住居が含まれていました。中級階級の武士である「平士」は特に多く、約 25%の土地を占めました。平士が多く住んでいた長町が、大きな火災を被ったことのない理由の 1 つは、平士の存在のためだと考えられています。彼らは、町民の約 7 倍の土地をもち、庭園とつながる広々とした敷地と用水がありました。このため、江戸時代の一般的な状況に比べ、火災がすぐには広がらなかったのです。

侍階級の最下層の足軽は、市内各地の「組地」と呼ばれる指定区域に住んでいました。他の藩とは異なり、加賀藩では彼らは独立した住居を与えられていました。これは、仕事に十分な機会があったことも伴って、多くの足軽にとって加賀藩を魅力的な場所に使っていたと考えられます。